

多人数クラスにおける文章作成法授業 —教員の労力を軽減して効果を上げる試み—

三原 容子

はじめに

全国の大学で文章作成関係科目を担当している教員の本来の専門分野はさまざまだろう。本学（山形県酒田市の東北公益文科大学）で2001年度から2008年度まで開講されていた「文章表現法」はジャーナリスト出身の教員が担当していた。2009年度から開講された「論理的文章作成法」を担当している私の場合、近代日本の教育史、思想史、運動史、地域史が専門であって文章の専門家ではない。大部分の大学教員と同様、自らが論文やエッセーなどを書いてきた経験と、学生のレポートや論文を指導してきた経験があるのみである。

そんな私が文章法の科目を担当するようになったのには以下のような経緯があった。

第一に、特に専門書のなかに非常に読みにくい文章があることについて、残念だという気持ちを長い間抱いてきたことである。読み手が困るのはもちろんであるが、立派な中身がありながら生硬で難解であるために読み手に伝わらないのは、書き手にとっても不本意なことだろう（難解であること、イコール高尚なことと考える者を除く）。実際に会って話を聴けば言いたいことが理解できるのに、文章だとわかりにくいこともある。読みにくい理由には、読み手に伝えられるレベルまで消化されていなかったり、伝わるように推敲する手間を惜しんでいたり、その他にも理由があるのだろうが、いずれにせよ、せっかくの成果をうまく伝えられていない点で問題である。

第二に、学生のレポートや論文を指導する経験を重ねる中で、少しずつコツのようなものを蓄積してきたという思いもあった。材料の集め方や組み立て方の指導に加えて、書き癖や接続詞などを赤ペンで指摘していくと、読みやすく

伝わる文章に変身していく。1年生の基礎ゼミ（本学での科目名は「公益自由研究」）やゼミ（同じく「専門演習」、大学院では「演習」）の学生に対する濃密な個別指導だけではなく、多人数相手の一般科目のレポートでも、文章を書かせるための試行錯誤を重ねてきた。読んでもらえる文章を書く力をつけることについて、強い関心を持ってきたということである。なお、公益自由研究のレポートは毎回「レポート集」にまとめて図書館に置き、卒論と修論は私のホームページ「ようこそ三原研究室@ネットへ」上で公開してきた。

2008年のこと、2009年度入学生から実施される新しいカリキュラムが決まった。主に1年生を対象とする「論理的思考を養う基礎科目」という科目群が新設され、3年次進級には4単位（2科目）、卒業には6単位（3科目）の修得が必要と定められた。この科目群には理系の実験科目や統計学、社会調査論や社会学の考え方といった科目が含まれる。カリキュラム改革論議に加わっていた私は「論理的文章作成法」科目を提案した。数学や理科に対して強い苦手意識を持って入学してくる学生が多い本学では、理系的印象が強い科目の履修を強制すれば前途を悲観する学生が出てくる可能性が高くなるだろうし、それ以上に、論文指導のような文系の科目も「論理的思考」を養うのに有効ではないかと考えたからである。私の場合、高校時代には数学・理科で点を稼いだが、論理力の必要性を痛感したのはむしろ大学入学以後、議論を戦わせる世界を知ってからだった。多種多様な価値観を持つ人間が構成している社会（地域～国際）の問題を扱うには、確実な証拠（エビデンス）を積み重ねていく理系的学問領域とは少々異なる論理力が求められる。

そして、提案した新科目の担当を自ら引き受けてしまった。新規科目を担当すると、構想を練る準備段階から成績評価まで、かなり大きな仕事量に加わる。しかも別の新規科目（日本史b）も担当することになっていた。もともと平均担当科目数を上回るころへ、いくつかの仕事も重なっていた。それでも引き受けたのは、まずは前述したような思いがあったからである。さらに、多人数を相手にしても担当者が過労で倒れることのないような、労力を節約した授業の創造に挑戦するという野心を、大胆にも抱いたからでもある。

2008年秋から準備にかかり、2009年度と2010年度の2回実践してみた。2回目が終わった時点でうまくいったと手ごたえを感じた。今後は部分的な手直し

で済みそうである。

本稿は2010年度前期開講の授業の状況やねらい、具体的な方法や雰囲気を紹介することを目的としている。公表することによって、同じようなニーズのある大学で参考にしてもらえたり、学内外からの批判を活かして自ら改善したりすることができるだろう。

以下ではまず初めに、「論理的文章作成法」のカリキュラム全体における位置づけや受講生の数など、授業をとりまく条件について述べ、本科目のねらいと多人数を活かすための工夫を説明する。その後2010年度前期に実際に行った15回分の授業を紹介する。

1. 科目の置かれた環境と授業条件

本学は2001年に山形県酒田市に開設された公益学部公益学科のみの単科大学である。開学当時は経営系・社会系・環境系の3系、現在は政策マネジメントコース・地域共創コース・社会福祉コース・環境サイエンスコースの4コースが置かれている。環境サイエンスコースの学生はいわゆる理系の科目を多めに履修する。情報処理関係の大学院への進学者やSE（システムエンジニア）の仕事に就く卒業生も少なくないが、大多数の学生は、他大学の法学部や経済学部、文学部等の学生とともに「学部不問」の求人に応じて就職活動を行う。ほぼ文系の大学と言ってよいだろう。

山形県の日本海側にある庄内地域には（山形大学農学部を除き）他に大学がなく、私立大学としては授業料が低廉であること、就職実績に定評があることなどの理由から、受験業者が示す偏差値（最低ライン）よりもかなり高い学力の学生もたくさん入学してくる。学校長推薦や一般入試など様々な入試を実施していることもあって、学生の基礎学力にはかなりの幅がある状況である。

2009年度から始まった新カリキュラムでは、入学から卒業までの各年次で学問研究の基礎基本となる科目（基礎教育科目）から各専門の応用科目へと体系化を図った。基礎教育科目には「論理的思考を養う基礎科目」や「各コース履修に必要な基礎科目」、「リベラルアーツ基礎科目」が含まれている。

基礎教育科目については、なるべく1年生（関西の大学における1回生）の

間に、遅くとも2年生後期までに履修を終えるよう誘導するため、3年次進級要件が決められている。3年次進級には合計で50単位（30科目弱）以上が必要であり、さらに、たとえば、「論理的思考を養う基礎科目」は、卒業要件の6単位（3科目）中、3年次進級には4単位以上（2科目）以上必要であるなど、科目群ごとの必要単位数が決められている。もしも成績評価が「不可」ならば、（同科目群の）別科目か（科目群によっては）同じ科目に再挑戦するしかない。再挑戦しても「不可」であれば、履修状況によっては3年次進級ができなくなり、その時点で留年が決定する。そこで学生は各科目群で必要とされる単位を早め早めに確実に履修していこうという行動を取る。

2010年度の場合、「論理的思考を養う基礎科目」は前期・後期合わせて9科目ある。前期は「統計的考え方*」「社会学の考え方」「簿記の考え方」「論理的文章作成法」の4科目、後期は「数学的考え方*」「基礎の自然科学（化学）*」「基礎の自然科学（物理）*」「基礎の自然科学（生物）*」「情報と社会」の5科目である。しかし、「*」印をつけた5科目には授業内容などの事情から10名～数十名の人数制限がある。そのため、200名余りの新入生の多くが、実際には残りの4科目から卒業に必要な3科目を選ぶのである。

1年生で履修させたい科目は、各クラスの語学や情報処理科目と重ならない時間帯におかれている。そこで、一つの時間帯に基礎教育科目が2～3科目重なることも多い。たとえば2010年度前期の「論理的文章作成法」と同じ時間帯に、主として1年生向けの「政治学」と「自然地理学 a」がある。政策マネジメントコースに進むことを考えている学生の場合は「政治学」にしようか、地歴の教員免許状取得を考えている学生の場合は「自然地理学 a」にしようか、等々と迷った結果、3科目のうちの1科目を履修することが多い。

本科目を履修する学生は、以上のような状況のもとで、進級と卒業に必要な科目であることを十分に理解している。言い換えれば、落とすわけにはいかないという気持ちが強い。また、同じ時間帯に他の科目を受講した学生の中には、翌年に履修するつもりの者も多いと聞く。そこで、2010年度は履修者数が108名（うち1年生97名、2年生10名）だったが、今後もっと増える可能性が高いということになる。

これだけの人数に対してどのように文章力の教育をしたらよいだろうか。担

当者が一人だけならば、たとえ複数の少人数クラスに分けても担当受講生数に変わりはない。従来は文章法関係の科目の多くが、添削という長時間労働を要する指導によって担われてきた。しかしそうした方法では担当者の健康問題が生じてくる。一人一人の文章に赤ペンを入れていく膨大な時間を省いて文章力をつける方法が求められる状況である。

2. 身につけさせたい力

科目づくりの当初（2009年度）と二年目（2010年度）とでは、身につけさせたい力に大きな変更があった。

当初は、「論理的」という言葉を強く意識したため、文章を書く力だけではなく、因果関係や確率判断、相関関係、帰納と演繹など、推論の当否についても学んでもらおうと考えた。そこで、たとえば、「AであるならばBである」場合には「Bでない、ゆえに、Aでない」は妥当であるという、「前件の肯定」と「後件の否定」なども作業シートに組み込んだ。論文指導の中で根拠と結論のずれを理解してもらうのに苦労した経験も頭にあった。「クリティカルシンキング」や「レトリック」「論理的」などが表題に入っている心理学や論理学の文献では必ず出てくるテーマである。

しかし二年目にはそれらの内容をほぼ全面的にカットした。一番大きな理由は私自身が消化吸収できなかったことである。完全にモノになっていないものを提示して、期待するような反応が返ってこなければ、それは教員の側の責任である。因果関係を説明する際の直訳的な用語や文例の生硬さを何とかしてもみほぐして使用しようとしたが、なかなかうまくいかなかった。私の論理学理解レベルに問題があったのだろう。

推論関係の内容をカットして、論理的文章を書く力を身につけさせることにしぼった。書けるようになってほしい論理的文章は「不特定多数の人に対して、読みやすく、わかりやすく、説得力があって、書き手の考えを正確に伝える文章」である。なぜそう考えたのか。

仲のよい友人同士の会話ならば「あの人って何？ ねえ！」「ホントだね！」のような言葉だけで意思が通じ合う。ボディランゲージだけでも済むかもしれ

ない。試験問題でも、高校時代までは穴埋めや選択など、言葉がうまく使えなくても答えられる問題が多い。

しかし大学入学後は、高校時代とは違って、文章を書く機会が格段に増える。科目を修得する過程で課されるレポートがあり、やがては卒業論文を書かなければならない。3年生の後半からはエントリーシート（ES）の記入作業がある。社会人となってからも、企画書や報告書などを書かなければならない機会は非常に多い。文章を書くことを避けて通ることはできないのだ。

これらの文章は、書き手の経験や気持ちを分かってくれている身近な人ではなく、年齢も考え方も様々な、書き手をよく知らない人を相手に書かれる。読み手が忙しくてゆとりがない場合には、わかりにくい文章を忍耐強く読んでもらえないこともある。せっかく書いたのに、書き方に問題があるために最後まで読まれなかったり誤解されたりするのは、非常に残念なことである。まずは、書いた内容を読んでもらえて正確に理解してもらえることが重要だ。伝わって初めて、書き手と読み手の主張の前提や資料の違いなどが互いに認識される。さらには議論して前進する道も開けるだろう。

人は一人ひとりが異なっている。性別や年齢、生育歴も能力も異なる。地域の問題から国際政治関係まで、対立のない問題はない。しかし、読んでわかりやすい方が好ましいことや、具体例や理由があった方が説得力があることについては共通している。そこに人間の知性、理性、論理というものが存在するのではないだろうか。

以上のような考え方で、科目の目標を「不特定多数の人に対して、読みやすく、わかりやすく、説得力があって、書き手の考えを正確に伝える文章」を書かせることにしぼったのである。

なお、「論理的文章」の科目を修得したのに「非論理的」な内容の文章を書いてもらっては困るという考えから、信じ込んでいる者が多い血液型性格判断に関わる「バーナム効果」と「科学」の装いでだまされる者が多い「ニセ科学（似非科学）」について、情報を補足的に入れていく。

3. 多人数を活かした授業

「不特定多数の人に対して、読みやすく、わかりやすく、説得力があって、書き手の考えを正確に伝える文章」を書く力を育てるために、一人ひとりの学生の文章に赤ペンを入れて問題点を指摘したり、より良い書き方を例示したりするならば、担当教員は膨大な時間とエネルギーを要する。それをしないで済み、かつ、多人数を一度に受け持つことをデメリットではなくメリットとして活かすため、二つの方策を採った。一つは、学生を読み手として利用することであり、もう一つは多人数が教室にいることによって楽しい雰囲気を作り出すことである。

まず、学生を読み手として利用するということについて説明する。教員が個々の学生の文章を添削する場合、直接的に想定されている読み手は担当教員である。しかし読み手が教員である必要は少しもない。「不特定多数」に読まれることを常に意識させればよいのである。そこで毎回の作業シートや提出課題のすべての氏名欄を下のような形にし、必ず誰かがチェックする状況に置かれていることを見える形にしたのである（「C1」は学籍番号欄、空白欄は氏名欄）。

作業終了後、教員の指示に従って作業シートを誰かと交換する。交換

作業をした人	C1	
丸付けをした人	C1	

相手は前後左右の席の学生であることもあるが、遠く離れた席の見知らぬ学生であることもある（具体的に「4列以上離れた席のなるべく異性の人」などと指示することもある）。「赤ペンさん」と私が呼んでいる学生（以下では丸付け人と記す）は、赤色ボールペンで丸や花丸や、「この字は読めません」「着眼点が良いですね」「もう少し真剣に取り組みましょう」等々のコメントを書くことを第1回から徹底していく。状況によっては、丸付け人一人だけではなく、丸付け人の周辺の学生たちにも、赤ペンの入れ具合とともに見てもらう。複数の目に触れるというわけだ。たまに交換を拒否する学生がいても、交換が授業の重要な作業の一つであることを個人的に注意すれば、まもなく改めてくれる。

誰かに読まれることや、誰かに批評的コメントを書かれるかもしれないこと、

誰に読まれてもよいことを念頭に置いて書くということには緊張を伴う。同時に、他人の書いたものを読んで赤ペンを入れる経験をする事で、「読みやすい」「読みにくい」「伝わる」「伝わらない」を感じる経験をすることができる。

整理がしやすいよう、作業シートや課題用紙には印刷してすぐにパンチ穴をあけておく。授業終了後に最前列の机の上に提出してもらったシートを学籍番号順に並べ替えて綴じ紐で綴じ、履修名簿に出欠の印をつける。教員による内容チェックには、学生の赤ペンと区別できるよう緑色のボールペンを使用した。長時間を要する添削はやらない。教員にゆとりがある時ない時、状況次第で緑ペン作業のていねいさは変幻自在である。忙しくて簡単に目を通すだけの場合でも、学生が他人の目を意識して作業するという目的はすでに達せられている。

かつて論文指導の際に、指導が度重なるうちにやがて、「ここはわかりにくいね」「ここは飛躍していてつながっていないね」という私の声が「幻聴」のように聞こえてくるという学生の話があった。「幻聴」が聞こえてきたということは自分で自分の文章を客観的に見ることができるようになったということである。他人の批評を受ける機会は貴重であり、回数が多いほどよい。

次に楽しい雰囲気づくりである。もっと上手に書けるようになりたいと進んで受講している学生もそうでない学生も、本科目の単位修得を切望している。だから成績評価の対象に出席等を含めるだけで、真面目に出席して課題を提出する。2010年度シラバスの「評価方法」には「出席して作業シートに取り組むこと（5点×15回）と課題の提出（5点×5回）」と明記した。結果として、108名中、早期に断念した3名を除き、最も欠席回数が多い学生でも4回だけ、ほとんどの学生は欠席0回か1回で、すべての課題を提出した。きわめて勤勉であった。

しかし科目履修中に真面目であるだけでなく、文章で表現する楽しさを知って単位修得後に積極的に書くようになってもらいたい。小中学校の読書感想文の宿題で体験する苦痛を繰り返してはならない。楽しく学んで書く喜びを知るためには多人数の存在を利用することが効果的である。以下では、雰囲気づくりの実例を、①特に楽しいと評価してもらえた取り組み（3件）、②緊張と弛緩、③個人的に楽しいと感じることのできる工夫の順で紹介する。

① 多人数ならではの楽しさ

主張内容の説得力増強には理由説明をつけるの良いことを学ぶという作業シート（第6回）に、「森は好きですか」の「はい いいえ」を丸で囲んでから「なぜならば」と理由を記入する問題があった。その次の回（第7回）の授業は普段の自由席ではなく、「はい」席と「いいえ」席に分けて着席するよう白板で指示した。学生は自分の好みと異なる者がいるなんて理解できないといった様子でそれぞれの席に着いた。マイクを学生に渡して理由を述べてもらった。マイクは指示にしたがって次々と順送りにして、10名ほどが「はい」の理由を述べていき、次に「いいえ」の学生も10名ほどが述べていく。学生たちは「自分と同じだ!」、「エーッ?!」などと反応しながら聴いている。互いの理由を聴いて「異見」を知った上で、再度マイクを回して改めて理由を述べてもらった。ねらいは当たり、異見を聴いて自分の考えを深めるという経験を楽しいと感じてもらえたようだ。「不特定多数」を相手に書く際に、「私はそう感じませんよ」という「幻聴」（読み手の声）を聴くことができるようになるためのトレーニングである。

第10回に行った作業シートで、たとえば「その店で××を た。」に入れられる言葉を制限時間内にたくさん挙げてもらい、丸付け人にその件数をチェックしてもらった。語彙を豊かにするのがねらいである。その数がいくつあったか、5つ以下、6、7、8……20、21、22、23……と丸付け人に挙手してもらった。「ほーっ、すごい!」というざわめきが広がる。非常に件数が多いシートの語を私が読み上げた。「買った」「購入した」など以外に「盗んだ」「壊した」など想像力豊かで意外な言葉が笑いを誘った。「次はもっとたくさん書くぞ」という意欲も刺激された。

第15回（最終回）はコンテストを開催した。提出された600字課題の中から、教員の「独断と偏見と勢いで」15編を選び、書き手の氏名を伏せてパソコンに打ちこんだ。その中から受講生全員が2編を選んで出席カードに記入、最も票数の多い最優秀賞と、次の二人の優秀賞を決めた。表彰状は手づくりである。開票を全員が見守り、表彰式は温かい拍手に包まれた。

②緊張と弛緩のメリハリ

ハウツー的知識を聴いただけで文章作成力が身に付くことはない。今までに文章を書いたことがない者が関連本を読んでも、まさしく「畳の上の水練」であって、役立たないのは当たり前である。自分でやってみて、苦勞して苦勞して、その上でコツを知って初めて身に付く。そう考えているので、学生にしっかり作業をさせる（悩ませる）ことを重視した。作業中の教室は、あたかもセンター試験の試験会場のように真剣で、緊張感が漲る。その間、教員は机間指導（教室を巡回しての質問応答やアドバイス）を行う。そろそろ終えようかという頃合いを見計らって「あと3分間で終わります」などと声をかける。赤ペン作業の時も同様に時間を区切る。

赤ペン作業が進んだ頃に、「終わった人は前後左右の人とざわざわごそごそ検討しててください」と声をかけると、途端に張りつめた空気が緩む。私は密かに「ざわめきタイム」と名づけている。

シート交換の特別な指示をする場合や、覚えておくといふコツを説明する場合は「これからややこしいことを説明するのでしっかり聴いてください」などと声をかけると、教室内はシーンと静まりかえって一斉に教員の声に耳を傾ける。「傾聴タイム」である。

教室内を移動して交換相手を探して着席するまでは、出会いを求めて賑やかになる。相手のない学生が残っていないことは手を高く挙げさせて確認し、全員の準備ができると、再び静かに指示を聴いて、作業を始める。元の相手に返す時もまた賑やかに教室内で動く。

以上のような、作業タイム、ざわめきタイム、傾聴タイム、移動タイムが90分間の中で繰り返される。文章を書いたり推敲を重ねるといふ前頭葉フル回転の活動が続くと疲労困憊するが、リラックスする時間と組み合わせられているので、最後までだれてしまわずに済むし、精力を使い切らずに済む。

③学生の気持ちへの配慮

学生が楽しいと感じるかどうかは、作業シートや課題の題材にも影響される。たとえば将来エントリーシートを書く際に自らの長所を説明しようとしても、「私は短所ばかりの人間だ」と思いこんでいては気持ちががしぼんで書けない。

本科目で扱う題材は、自分を大切にできる気持ちをつくらせることができるよう、できる限り前向きなものにした。200字、300字、400字、600字と字数制限を設けて数週間おきに提出させた課題のテーマは以下の通りである。

200字 (181～200字)：○○○を選んでよかった（やってよかった、買ってよかった）ことを不特定多数の人に伝える文章を書く。○○○は、大学、科目、サークル、アパート、アルバイト、バッグ、筆記具……。例：「公益大を選んでよかった」、「コンビニのバイトをしてよかった」、「花見に行ってよかった」等々。

300字 (261～300字)：何かに対して高く評価していることを不特定多数の人に伝える文章を書く。例：「私には○○できる能力がある」、「父は偉大だ」、「○○村はすてきなところ」等々。

400字 (361～400字)：「私のおすすめ」。産直ショップのチラシに○○産△△を、新聞の書評欄に○○著『△△△』を、車の雑誌に○○○（車種）を、大学の壁新聞に新発足のサークル○○○を等々。タイトルと「掲載が想定される印刷物等」を記入させる。掲載先は架空でも良い。

600字 (551～600字)：自由テーマ、文体は自由。新聞雑誌へ投稿するつもりで。内容をわかりやすく示したタイトルを5～15字で。〔文体とは常体文と敬体文のこと〕

もしも「公益について」とか、「沖縄の基地問題について」、「酒田港の利用促進について」といったテーマで書かせようとする、教員がよほど注意を払わない限り、ウェブ（特にウィキペディアなど）や文献を丸写しにした文章を提出する者が出てくるだろう。自分の頭で考え自分の文章で書くことを望む場合、テーマ設定にも注意が必要である。私的なテーマが多いが、丸写しができない点でも、エントリーシート作成のトレーニングとしても、こうしたテーマで良かったと判断している。

また、書かれている内容を否定しないように留意した。選んで良かったというサークルや種目、すばらしいと思っている本や人物を、教員の価値観で肯定したり否定せず、わかりやすく正確に伝わる文章であるかどうかにだけ徹した。もしも否定されて書くのが怖くなってしまっただけでは元も子もない。

4. 15回の授業（2010年度の場合）

3つの工夫を各回の授業でどのように盛り込んでいったのか。以下では2010年度前期（4月～7月）の授業を紹介していきたい。

第1回

第1回目は複数科目に出席して履修科目を決めるための45分間お試し授業である（必修科目を除く）。シラバスには「履修を迷っている学生も、前半か後半に必ず出席すること」と明記して、かつ初回出席も評価対象に含めることを示しておいた。

まずはシラバスの確認である。「テーマ：不特定多数の人に伝える文章を書く」、「講義のねらい・到達目標：大学段階以上で必要とされるレポートや論文などを書く上での基礎力をできるだけ楽しく養うこと。多くの学生に「受講前に比べて賢くなったなあ、書けるようになったなあ」と喜んでもらいたい。」などを読み上げて、授業中に取り組む作業と5回の課題提出によって評価すること、次回から赤ペンを持参することを確認しておく。学生のペンケースにはたいてい赤ペンが入っているが、持っていない学生のため、初回だけ何本か持って行く。

その後、文字のおけいこシートに取り組んだ。読みやすい文字を書くことを意識させるためのシートである。

不特定多数の人に読んでもらうためには、まずは読める文字を書かなければならない。レポートや卒業論文はパソコン作成が当たり前になったが、授業の出席カード（コメントカード）、定期試験の答案、履歴書やエントリーシート等々、手書きで書いて読んでもらう機会はまだまだ多い。判読が困難な文字では読むだけで時間がかかり、最後まで読んでももらえないかもしれないし、評価に悪影響があるかもしれない。

学生の中には、読みにくい癖字やくずした字を書く者がいる。そこで、他の学生に赤ペンを入れてもらう作業を開始する前に、書き癖を自覚してもらうのである。シートには次のように書いてある。

丸付けポイントは、読みやすさ（他の字との読み分け可能性）とていねいさ

です。

1行目はなぞって、2行目は手本を見ながら書きましょう。大切なのは読みやすさと、確実に読めることです。「シ」は「し」、「ツ」は「つ」をイメージするといでしょう。「ク」と「ケ」、「コ」と「ユ」、「ア」と「ヤ」など、書き分けに注意してください。漢字は画ずつ数えられるくらいに（小さくても口は3画）、また、全パーツで一つの文字として見えるように、たとえばへんとつくりをほどよい配置で書くこと。なお、お手本はパソコンの教科書体ですので、もっと読みやすく書ける人は手本を無視してもらっても結構です。

丸付け人の作業：バツ、アンダーライン、「もう少ししていいいに」など、どんどん指摘してください。

シートには、学生の苦手とする文字からピックアップした文字を並べた。「をそはほまよにたかやれねんえおむなめぬみゆらうろシツンソクケコエユヌスマアカヤセテチフレつしも力工加働衛欄驚講営学常書初」、加えて「自分の氏名」である。画数の多い漢字は、崩さないで書くトレーニングのために挙げている。お手本は教科書体フォントの太字（黒字）、なぞって書く行は同じく灰色（25%）を使って作成した。

科目によっては、教室の入口付近の机の上にプリントを置いて入室時に取っていくように白板に指示しているが、本科目ではそのような方法はとらない。手にとってすぐに先回りして読まれては困るからである。教員が話している時は聴くことに集中し、Aのプリントの時間にはAに集中し、Bのシートを手にしたらBの作業を行うというけじめをつけたい。そのため授業中に配付することになっている。なるべく短時間で全員に行き渡らせるために、半分くらいは前方から後ろへ送ってもらい、残りは最後列から教員が配る。全員に行き渡ったことを確認するまで、手元に届いたプリントを読んでいってもらうが、3分間もあれば配付完了である。

学生によって作業のスピードが異なり、完成に要する時間には差がある。作業途中でも交換の指示が出たら必ず誰かと交換して、丸やコメントを書いてもらう。2人で交換し合ってもよし、3人組になってもよい。赤ペンを入れたあと、また本人のところに戻してもらう。本人の作業→赤ペン作業→本人へ返却という授業プロセスに慣れてもらうのが、読める字を意識させることに加えて、初回のもう一つの目標である。丸付け人の氏名も記入するので、無責任なことはできない。

多くの学生は、小学校低学年以来久しぶりの「かきかた」作業を楽しんでくれる。作業シートは退室時に提出してもらう。前半後半と2回同じメニューで行う。後で学籍番号順に並べ替えて出欠等を記録する。

第2回

前回の作業シートを返却するために、授業開始20分ほど前に教室へ持参し、学籍番号順に並べた20～30名ずつの束を氏名欄が見えるようにずらして机に置いておく。氏名欄がシートの上端に設けてあると、ずらして置くときに好都合である。学籍番号の数字のうちどの部分が入学期（学年）を表し、どの部分が個人名の五十音順を表すのかを白板に示しておく、教室に来た学生が次々に自分の作業シートを見つけて取っていく。初めのうちは要領が飲み込めない学生もいるが、3回目頃には慣れて混乱がなくなる。

私が担当している2年生以上対象の科目「共生社会と人権」では、出席カードで個人的事情をカミングアウトする学生が少なくないためプライバシーに非常に気を使う。フィードバックのために読み上げる際にも個人が特定されないようにし、出席カードを集める時も必ず伏せて置くよう注意を与える。それとは対照的に、「論理的文章作成法」ではそもそも不特定多数者対象に書いている前提なので、配慮はしない。

今回のシートの一枚は、「誤解のないように尋ねる」ことを考える作業で、朝日新聞の連載漫画「オチビサン」のコピーを使った。黒い犬（ナゼニ）が「オチビサンてどんな本が好きなんだい？」と尋ねると、「オチビはね……、軽くて持ちやすい本が好き!! あと赤い表紙の本」と答える。ナゼニは「……ナルホド、質問のしかたがまずかったかな」と考えるというストーリーである。「どんな本が好きなんだい？」を言い換えるのが課題で、「() について尋ねたかったら」を3通り記入していく（他の課題は省略する）。

赤ペンのポイントとして「作業に取り組んでいるでしょうか。」と「(氏名欄も含めて) 読みやすい文字を書いているでしょうか。」と明記してあるが、口頭でも「しっかり見てあげましょう。授業の後で書かれたことを恨んだりしないでね。花丸もいいですね。」などと声を掛けている。

もう一枚は、文章の推敲の時間と手間を知ってもらうための作業シートであ

る。前年度に新聞に掲載された私のエッセー（各1500字）のうち一編のコピーを配って読んでもらった。5～6分もあれば読み終わる内容である。この原稿を書き上げるのにどれくらいの時間が必要だったかを考えてもらう。読んですらすら理解できる文章は短時間で書かれたように思う者が多い。

次に「締切数週間前段階での草稿」を配る。いつもならば完成原稿以外は残さない草稿を、授業で使用するために保存しておいたものである。掲載文（完成原稿）との違いを指摘してもらった。推敲作業が簡単ではないことを実感してもらえたようだ。どんどん書き込んでもらった後は、丸付け人のチェックが入る。しっかり作業しているかどうかを見てもらうのである。

いったん返却した文字のおけいこシートは、完成させた上で次回に提出するよう指示した。これが提出課題5回のうちの第1弾である。

二つの作業シートをどちらも退室時に提出、これで第2回の出欠をとると同時に、作業→交換の手順がなされているかどうかを確認する。教員が注意を促す時などは、緑ペンを使用する。特に文字については念入りに緑ペンで注意した。課題の字数が次第に多くなっていくと、判読困難な文字で書かれていては丸付け人が困るし、教員も困る。6月頃からは読みにくい文字は減点する予定なので、それまでには直すように何度か注意を喚起した。丸付け人の指摘にも遠慮がない。改善が進みにくい学生には文字のおけいこシートを再度課して提出させることで、最終的にはかなり改善されていった。

第3回

提出課題5回中の第2弾の用紙を配付した。前述したように「○○○を選んでよかった」テーマである。締切は2週間後、授業に持参することとしてある。そのねらいは用紙に次のように明記してある。

- ・人に伝える中身について、頭をフル回転させて考える。
- ・自分の言いたいことを伝えるにはどうしたらよいか、頭をひねる。
- ・字数制限内に収まるよう、何度も何度も読み返して、削ったり加えたりする。
- ・段落初めは1マスさげ、「、」「。」は行末に、などの原稿用紙ルールを確認する。

（他の紙を使ったりパソコンを使ったりして、決定稿を作成してから清書しましょう。）

この日の作業シートは、長いセンテンスを切って書き直すことである。指示文は「次の文章をもっと読みやすく分かりやすくなるように書き改めてみましょう。文章の達人以外、上手に扱えるのは、一文で最長80字位が限界でしょう。(1行40字で印刷)」である。例文は3つとも阿部紘久『文章力の基本』(2009年)から借りた。この回のように、使えそうな例文を他の文献から借りてそのまま使用することもあれば、教員が改作することもあれば、まったくオリジナルを使うこともある。最も難易度が低い第一問は「最近、あるコンビニは、店舗内で焼き上げたパンの販売を始め、自然志向・健康志向の製品を中心とした品ぞろえは、従来のコンビニとは一線を画したものであり、20代、30代の女性をターゲットに新機軸を打ち出している。」である。

センテンスを切って書き直すことによって読みやすく(わかりやすく)なることを実体験することによって、これ以後に学生が提出する課題の文章のセンテンスはすべて短めになった。長い文には必ず赤ペンが入る。執筆者も丸付け人も長い文章が好ましくないことを身につけているからである。こうして各回の授業で学んだことが活かされていく。後日、薬が効きすぎて、長い文はすべて駄目だと考える学生がいることに気づいた。細かな配慮が必要であることを改めて痛感した。

この日に第1弾課題の文字のおけいこシートを提出してもらった。ざっと目を通して問題がある場合のみ緑ペンを入れた。

第4回

この回に使用したのは、昨年度の学生が自由テーマで書いた500字の文章3編である。それほど上手ではないものを選んである。作業内容は「不特定多数の人にとって読んでざらりと理解できる文章にするにはどのように改めるとよいのだろうか。」で、傍線を引いたり、一部を入れ替えたり、批判的なコメントを加えたりすることが期待されている。

作業を見て回ることで教員が学ぶことは多い。直接に質問を受けることもある。その日の授業や次回以降の授業で取り上げるべきテーマを提示してもらっていることになる。たとえば「個人的な主張や価値観を述べない方が良い」という書き込みは、個人的主張をいけないことと考えている学生の存在を知らせ

てくれる。主張がいけないのではなく、読み手に伝わる主張を書くにはどうすればよいかという課題を加える必要性を感じて、後述するように第6回で扱った。

他人の文章を読んで推敲する作業をしたあとで、伝わる文章を書くポイントとして、次のようなまとめをした。この回以降も何度か繰り返し話したことがある。

一つは、一定の字数の課題をこなすためにはその字数以上の内容がなければ書けないということである。書いてみたけれど字数が不足しているからと無理矢理書き足していった文章は、内容の薄さが露呈してしまう（例文の一つはそうした文章を選んだ）。他の科目の講義や新聞雑誌テレビで情報を得ること、友人知人家族と会話すること、トイレや入浴中にあれこれ思いをめぐらすこと等々によって内容が充実して、はじめて中身のある文章が書ける。たとえばサークルがすばらしいと言いたい時、「ステキだ、楽しい、面白い、入って良かった……」と並べてみても、不特定多数の人には伝わらない。どこが良いのか、なぜ良いのか等々と考えて、字数に入りきれないほどの材料を用意してから整理すると良い。文章を書くには、充実した日々の生活や、積極的な情報収集が必要である。

もう一つは文章の書き方に関して、構造とパーツの問題である。初めの段落でAを述べ、次の段落ではBについて述べ……という構造がしっかりしていると書き手に伝わる。どんな順序で述べていくと良いのかを意識しよう。パーツは、文の長さ、同じ語の頻出によるしつこさ、語尾の単調さ、読点を打つ頻度など、読みやすい文章にするコツで、この科目で順次取り上げていくテーマである。

第5回

第3回に課した第2弾の200字課題を持参する日である。いつものように交換させると、親しい友人とばかり交換する学生が多いので、まずは起立させ（本学の学生は車イスの学生に臨機応変で対応する）、指示に従って離れた席の学生と交換し、交換が終わると着席、立ったままの学生が交換し終わって全員が着席したところへ「赤ペンを始めてください」の合図で作業を開始する。

とりあえず適当に時間を区切って机間指導をし、様子を見て時間を延長し

たり、前後左右の学生とのざわめきタイムとした。赤ペンの入った用紙は授業終了時に集めて、教員がざっと目を通して、場合によっては緑色のペンを入れ、翌週に返却する。

その後、「余分な言葉を省く」作業シートを試みた。書き改めることで短くて読みやすい文章にすることを試みるという趣向である。例題は次のとおり。

彼は中学校からの友達で、14年間という長い付き合いである。出会いは中学校2年生のときであった。私が通っていた中学校に彼が転校して来て、同じクラスになった。

↓

彼とは、14年間という長い付き合いである。中学校2年生のときに彼が転校して来て、同じクラスになった。

第3弾の課題用紙を配付した。「何かに対して高く評価していることを不特定多数の人に伝える文章」である。3週間後に持参するよう明記してある。

第6回

前回の課題文章への赤ペン作業の中で出てきた問題が「原稿用紙の使い方」だったので、まずはプリントを配付して確認することにした。ウェブを検索すると、「原稿用紙」の語でたくさんのサイトがヒットする。その中からコンパクトなものを選んでA4一枚表裏で収まるように手直しをしただけのプリントである。出典を明記し、「原稿用紙の使用方法、引用文の示し方などについては、たくさんの参考文献があります。「レポート」「論文」「原稿用紙」などのキーワードで本を探して読んでみたり、ウェブで調べてみたりしましょう。」と付記してある。

原稿用紙の使用方法については多くのハウツー本が出ているし、サイトもある。段落の区切りを1マス下げることによって示すのは、今日もなお共通のルールであろう（メールなどで1行空けることによって段落を示す方法は別として）。しかし、句読点や括弧閉じの記号を行頭に入れない「禁則処理」は、今や原稿用紙使用時限定のルールとなっている。ワープロ専用機登場以来、今日に至るまで、キーボードで書く場合には機械が自動的に処理をしてくれ、小さい「やゅよっ」についても行頭にこないよう文字間隔を自動調整してくれる。禁則処理に神経を使う必要のない時代になったようだ。

日本語の表記法には唯一の正解と言える正書法がないと言ってよい。文献の引用方法も学問分野によってかなり異なり、旧い方法と新しい方法が混在するのが現状である。最低限知っておいてほしいことは、段落が変わったことを一目で見てわかるようにすること、句点の代わりに「？」を使用する場合は文の終わりがわかるよう1マス空けること、引用部分がわかるように「」や、長い場合にはその他の工夫をすること、くらいだろう。横書きの英数字は2文字で1マスというルールも、新聞雑誌によって扱いが異なるので、一度示す程度にとどめた。学生が将来論文を投稿する時には、応募要領に合わせれば済む話である。

この回の作業シートは「論理性を高める（正しそうな感じを高める）」がテーマである。シートの冒頭に次のように書いた。

一般的には、中学高校の数学の証明問題のような100%正しい議論を用いることは珍しいでしょう。不特定多数の人に「かなり正しそうだ」と感じられることが重要です。そこで、理由をいう（論理性を高くする）練習をしてみましょう。今回はすべて常体文を使いましょう。

たとえば、「好きな果物を一つ挙げ、それについて好きな理由を添えて述べましょう。」として「私は_____が好きだ。なぜならば_____」などの文を作らせた。前述した「あなたは森が好きですか。」に「はい・いいえ」を答えて理由を述べる問題もこの回の作業シートである。教育的ディベートと同じような、自分の主張とは無関係に理窟を述べる練習として、「大学生はアルバイトをした方がよい。なぜならば……」と「大学生はアルバイトをしない方がよい。なぜならば……」の両方を書く問題もつけた（主に小野田博一『世界一やさしい論理トーク練習帖』（2009年）を参考にした）。

第7回

入室して来た学生は白板に書かれた「今日の座席は指定です。森が好きですかに「はい」の人は……に、「いいえ」の人は……に着席してください」の指示を見て（担当教員も早めに待機中）、それぞれの席についた。「はい」と「いいえ」の割合はほぼ2：1だったので、3列中の2列を「はい」席、1列を「いいえ」席とした。前述したようにマイクを順々に回して理由を述べてもらった。

とっさの思いつきで語ってもよいし、前回書いた手元の作業シートの記述を読み上げてもよい。あらかじめ全員の耳に届く話し方を求めているが、滑舌の悪い学生には「もう一度はっきりと話してね」とやり直しをさせた。さまざまな意見を聴くナマの体験は面白かったようで盛り上がった。

その後もう一度改めて理由を述べてもらう。考え方の異なる人の存在を知ったことによって「……と感じる人がいるでしょう、しかし……です」と説得力が増す。短時間で成長が見えるのが教員にとっての喜びである。物わがりの悪い読み手や価値観の異なる読み手から、「どういうこと?」「信じられない」などの“つつこみ”が入るのを想定しながら書くと良いこと、主張を理解してもらうために説明を加えたりエピソードを入れると、説得力が増すとともに、必要な字数がどんどん増えていくと話した。

この後、論理的な文章の「頭括型・尾括型・双括型」についての説明をした。結論（言いたいこと）を最初に述べてから理由（なぜならばの中身）を述べるのが頭括型、理由の後で結論を述べるのが尾括型、最初に述べた結論を最後に再び述べるのが双括型である（後正武『わかる、使える「論理思考」の本』（2010年）参照）。読み手の立場に立つと、レポートや論文などの長い文章では双括型が親切である。〇〇型などという名称を覚える必要はないが、結論と理由を意識することは大切だろう。

頭括型：イチゴはバラの仲間であろう。なぜなら形が似ていて香りが似ていて色が似ているからだ。

尾括型：イチゴとバラは形が似ている。香りも似ているし、色も似ている。だからイチゴはバラの仲間だろう。

双括型：イチゴはバラに似ている。なぜなら形も似ていて香りが似ていて色が似ているからだ。イチゴはバラの仲間だろう。

この回は作業シートを利用しなかったため、出欠を取るために出席カード（コメントカード）を配付した。毎回作業シートを利用するタイプの科目では「代返」の可能性は少ないものの、念のため3枚、4枚ずつ、着席している学生を数えながら手で配る。2分もあれば完了する。「書かれたものはすべて読むが、書かなくてもかまわない」と話して感想などを自由に書いてもらった。指定席に分かれて意見を述べて面白かったという声は、直接にも聞いたが、主にカードのコメントで知ったのである。出席カードは作業シートと異なり、次の回で

返却しない。

第8回

第3弾の課題「何かに対して高く評価していることを不特定多数の人に伝える文章」を持参する日である。交換して赤ペン作業に取り組ませた。

作業で疲れたところへ息抜きに「パズル」の作業シートを配付した。朝日新聞に毎週掲載される「beパズル」の中の「セイムセット」のコピーを貼りつけたものである。下部に大きく余白が設けてある。

確実に答えを出す方法を考えるために頭を使うだけではなく、解けない人に対する説明を考えるのがねらいである。学生たちは箇条書きや表や文章で説明した。真剣に取り組んでいるかどうかをチェックするのは、この回も学生の丸付け人である。

この回に第4弾の課題用紙を配付した。実在か架空の媒体（出版物や掲示板など）で何かをすすめる文章である。「私のおすすめ」が何か、また、掲載する印刷物等は何かを記入する欄を設けてあり、3週間後に持参することを明記してある。

第9回

前回は互いに赤ペンを入れてから提出させた第3弾課題の文章の中から12編（無記名）をパソコンに入力して配付した。2段組で9ポイント、A4判両面印刷で1枚である（多人数科目ではなるべく枚数を少なくしたいので文字を小さめにしている）。どこをどうしたらもっとよい文章になるのか、赤ペンを入れる作業で苦しんでもらった。その後で、教員のコメントを述べた。

まず全体的に、「不特定多数」の人を対象とする意識が高いこと、長すぎる文がほとんどないことを高く評価した（褒めた）。また、良い文のあり方には唯一の正解というものがないという前提を確認した。その上で、学生の文章にしばしば見られる問題を指摘した。

常体文と敬体文の混在は文章の達人以外は厳禁である。また、いくつかの内容を「……だが」、「……ですが（ですけれども）」でつなげている場合、たいいの場合に切って短い文にすることができる。「とと思う、と考える、と考える

られる」が続く場合、その部分をばっさりカットした方が多いことが多い。本人の頭の中では明快に理解している人物や事柄を、事情の分からない人に文章で読んでもらう場合には、わかってもらうための配慮（説明の工夫）が必要になる。同じ文末が続かない方がよい。具体的な描写があるとぐんと伝える力がアップする。等々。

学生たちは真剣にメモを取る。作業シートにも書き込む。メモ入りのシートは一旦提出してもらうが、次週には本人に返却しているため、恐らく各自が保存していると思われる。

第10回

「語彙を増やす」作業シートを使用した。シートには次のように書いてある。

次の□にいろいろな言葉を入れてみましょう。ただし、言葉の持ち札を多くするきっかけにするのが目的なので、「買った」「意見を述べた」はいいけれど、「買わなかった」「意見を述べなかった」のような否定表現はアウトとします。丸付け担当者は、おかしな表現でなければ、一つずつ○をつけましょう。誤字等には注意してあげましょう。その後、他の受講生の発表を聞いて、よいと思った表現を追加して記入しましょう。すべて常体文で書きましょう。自由で広い発想をしましょう。

「昨日の会議中、私は○○について□た。」など4問ある。1問ずつ席の近い学生と交換してチェックし件数を記入する。

件数を丸付け人の挙手によって確認していく。件数の多いシートを2名分ほど選んで言葉を教員が読み上げる。件数の多寡によって成績に差がつくわけではなく、一生懸命作業していれば評価される授業だということは認識されていても、ゲームのような雰囲気に教室内は熱くなってくる。2問、3問、4問と進むと件数が多くなっていく。小説のプロットの核になりそうな楽しい情景を描いた言葉も登場し、笑いが溢れた。

なお、受講生の2～3割が普段から電子辞書を広げて授業を聴いている。わからないことを即座に調べる態度を推奨しているせいでもある。しかし、「語彙を増やす」作業の時だけは、公平を期するために辞書の使用を遠慮してもらった。

この後、語彙を増やす具体的な方法を提供する二つの方法を示したプリント

を配付した。一つは類語辞典の紹介である。私の使用している『角川類語新辞典』の場合、たとえば「陳述：意見や考えを口で述べること」の項目の中に、名詞や動詞、複合動詞や四文字熟語など、関連する語彙がずらりと並んでいる。もう一つは電子辞書のジャンプ機能を利用した方法である。たとえば「話す」を和英辞典で引くと、「会話する」「相談する」などに近い多くの英単語を見つけることができる。そのうちの一つspeakを見ると、「しゃべる、物を言う、口をきく」などの新しい日本語を見つけることができる。最新の電子辞書には類語辞典が入っていることも多い。あくまでも一つのヒントである。語彙を豊富にしたいという意識を持っていれば、文章を読む場合に面白い言葉づかいを発見することもできるだろう。

この回に提出課題第5弾（最終）の600字の用紙を配付した。テーマは自由、文体も自由。「新聞雑誌へ投稿するつもりで。」と注記してある。

昨年度は500字だった字数を600字としたのは、新聞社によって投稿規定が異なる中で最も字数の多い朝日新聞の「声」欄の字数制限が変更になったため、それに合わせたからである。新聞への投稿は二重投稿が禁止となっているが、本科目の提出課題については一般の目に触れるものではないため、転用して投稿してもよいことにしている。投稿が掲載されたという報告が7月末までであれば、1回10点の加点をすると初回授業で約束してある。一年目は2名が掲載された（読売1、朝日1）。2年目はゼロであったが、多くの人に読んでもらう場に積極的に発表する意欲を刺激するための加点である（読みにくい投稿が多数送られてご迷惑を掛けていたなら、新聞社の関係者の方々にお詫び申し上げたい）。

第11回

第4弾の課題を持参する日であるので、従来と同様の赤ペン作業を行い、その後、プリントを使って「レポートの書き方」と「さらにややこしいことを説明する時のコツ」の説明をした（作業シートはなし、出欠は出席カードでとった）。

「レポートの書き方」については、従来から基礎ゼミ（1年生前期の公益自由研究）で用いているプリントによって説明した。大学に入学してまだテスト・レポートの評価を経験していない新入生にとっては不安な時期である。私にも、

新入生時代に「レポート用紙」に書くのが「レポート」であると勘違いした苦い思い出がある。科目によって、同じ「レポート」という名称でも求められる質と量は千差万別であり、各科目担当者の求めるレポートの質に対応するよう念を押しした上で、私の考えるレポートについて説明した。

プリントにはレポートについて、「卒業論文のミニミニ版」、あるいは「不特定多数の人に読んでもらう3つの部分からなる文章」と説明している。「3つの部分」とは、はじめに、本論、おしまいに、の3つである。

「はじめに」部分には「なぜこのテーマを選んだのかという動機や理由を書く。Why、Who、When、What、Where、(How)などを明らかにしたいというテーマを示す(できるだけ具体的に絞る。Yes・Noの問いでもよい)。こういうものを使って、こういう視点から、といった方法もできるだけ示す。」と説明してある。

「本論」部分には「こうしたら(これを調べてみたら)、こうわかったという説明(具体的に)」を述べていく。

「おしまいに」部分には「要するに～～がわかった、という要点。まだまだわからないこと。これからの課題」などを書く。

さらにプリントには、架空のレポート例も挙げてある。

口頭では、引用について、次のような説明を加えた。引用する場合は、他人の著作を自分が書いたかのようにして使うのはアウトであるが、ルールを守って使わせていただくことは、先行研究を一歩進めることにもなり、認められている。引用文が短かければ「」で囲って引用部分を明示する。もし長い場合はどこからどこまでが「」なのかが見にくいいため、前後に行を空けたり、2マスほど下げたり、フォントを小さくしたりするなど、引用部分をわかりやすくするための工夫をする。高校までは百科事典やWebサイトを写す程度の調べ学習しかしていない新入生が大部分であるので、一度話ただけでできるようになることは望めず、他の授業での指導と相まって体得してもらえない。

「さらにややこしいことを説明する時のコツ」は、「卒業論文などで、込み入った内容を不特定多数の人に説明する場合」の注意を書いたプリントである。論文指導の中で、読み手に負担を与えない親切な書き方を説明するのに用いてき

た方法である。およそ「高校まで勉強してきた人にわかるように」というレベルのわかりやすさで、「バーチャルな博物館（資料館）」を設計し案内も行うことを考えてもらう。ガイド（バスガイド、案内ガイド）の口ぶりなので敬体文を用いるが、実際の論文で使用するのが常体文であるのは言うまでもない。

相手に正確に分かりやすく伝えるために博物館を建てる。看板が展示内容に合っていなければ見学者は戸惑うだろう。適切なタイトルが必要である。無言のまま手を引いて連れ回されるよりも、入口のところで「これから〇〇、△△、□□の順で見ていただきます」と心の準備をしてもらった方が安心して見てもらえるだろう。見てもらう順序（部屋の配置、コーナーの配置）をどうすれば理解が進むのかを考えよう。唐突に難しいパネル（引用文や資料など）の前に立たせるよりも、手の平で指し示しながら「こちらは〇〇による〇〇です、どうぞご覧下さい。」と説明して読んでもらった方が分かりやすい。展示物の質と量や説明板の文章を吟味しよう。「この部屋で〇〇について見ていただきます。」と予告してから見学してもらい、部屋を出るところで「ご覧いただいたことをまとめますと……」などと、部屋ごとにまとめるのも分かりやすい。最後には（レポートの「おしまいに」と同じく）「今まで〇〇、△△、□□を見ていただき、▽▽についておわかりになったと思います」と締めくくる。基本的には双括型である。

第12回

「言葉の順序を考える」の作業シート。かかる言葉について熟考した本多勝一による原則に従って作業する。丸付け人の赤ペンには「主語」についての戸惑いがしばしば見られるので、こうしたシートを作成した。たとえば、主語がなければいけない、主語が二つあったらおかしい（「は」と「が」の両方を主語と考える）など、英語の知識に影響された判断によって、赤ペンを入れていることがある。しかし日本語の場合、主語はなくてもよいし、文の先頭に置く必要はまったくない。

まず本多勝一の原則を掲げた（『中学生からの作文技術』による）。

- ・「かかる言葉」と「受ける言葉」は近いほどわかりやすい。
- ・「美しい水車小屋の娘」は「水車小屋の美しい娘」とした方が誤解されない。
- ・「節」が先、「句」をあとにする。

- ・同じ「節」(または「句」)では、長い方を先にする。
- ・長さが同じくらいときは、大きな(広い、重要な)内容の方を先にする。
- ・「長さ」も「大きさ」も同じときは、前後の言葉のなじみ具合で配置を考える。

その上で、「文を切らず、助詞も変えず、読点も加えず、わかりやすく書き直してみましょう」という問題を出した。たとえば「私は小林が中村が鈴木が死んだ現場にいたと証言したのかと思った。」「白い横線の引かれた厚手の紙を購入した。」などである。この回は9問出題した。学生の様子を見て全問を取り組ませることもできるし、適当なところで時間を区切って、真面目に作業しているかどうかの赤ペンチェックをしてもらってから教員の解説に移ってもよい。学生による作業スピードがかなり異なるので、この回では後半の問題については簡単な解説のみにとどめた。

作業や解説をした残りの時間、「ウィキペディア」の「バーナム効果」の項目(2010年5月14日最終更新)から抜粋したプリントを配付して説明した。「誰にでも該当するような曖昧で一般的な性格をあらゆる記述を、自分だけに当てはまる正確なものだと捉えてしまう心理学の現象。」と説明されている。「論理的」の語にこだわった前年度の授業内容に変更を加える際に、学生の間での「血液型性格判断」信仰の蔓延を考慮し、残した方がよいのではないかと考えた。学生がレポート作成等の際に多用する「ウィキペディア」の作り手について注意を向けさせる機会ともなっている(この項目の場合、内容から執筆者を推測することが可能である)。

第13回

前回に続き本多勝一の研究成果を利用して「テンの打ち方を考える」と題する作業を行った。本多勝一のテンの打ち方に関する原則は以下の通りである。

- ・テンは適当(いいかげん)にうってはならないし、うつべきテン、うってはならないテンがある。
- ・長いかかる言葉が二つ以上あるとき、その境界にテンをうつ(第一原則)。
- ・語順が逆順の場合にテンをうつ(第二原則)。
- ・筆者の思想としての自由なテンもある。

たとえば、「山下刑事は血まみれになって逃げ出した犯人を追いかけた。」を、「血まみれなのは犯人です。1、語順を並び替える方法と、2、テンを加える方法で、書き直してみましょう。」等、6問を提示した。

作業→丸付け→解説のあと、「ニセ科学とプラシーボ効果」についての説明を加えた。これも、前年度の「論理的」にこだわった名残りである。プリントに使用したのはWebサイトの菊池誠「ニセ科学入門」とウィキペディアの「偽薬」の抜粋である。「マイナスイオン」や『水からの伝言』で有名な「波動」など、大学入学後早い段階で学生が知っておいてほしいトピックを並べた。他の「論理的思考を養う基礎科目」等で学ぶ機会があるならば、今後はカットして、文章作成法に特化することも考えたい。

第14回

いよいよ第5弾（最終）課題を持参する日である。互いの文章を遠方の席の丸付け人と交換して、互いに手を入れる。早く終えた人は前後左右の席の人と、自分が入れた赤ペンについて意見交換をする。良い文章を2、3編朗読したいので丸付け人に推薦してほしいと話したが、シャイな学生たちは申し出してくれない。そこで机間巡視の際に目をつけておいた数編を朗読させてもらった。

残った時間に「論理的文章作成法まとめと追加」プリントの説明を行った。学生の文章や丸付けを見ている中で補足しておきたいことを並べて作成したものである。

まず、論理的文章を「(友人や家族ではない) 不特定多数の人に、こちらが考えていることを正確に届ける文章」と明記して、そのために必要なことをまとめておいた。伝えたい中身があることが前提である。読みやすく分かりやすいためには文字、文の長さ、段落、語順などがポイントとなる。説得力がある文章にするには、内容の具体性や、理由説明が重要である。

その後に「追加」が続く。主に野内良三『日本語作文術』（2010年）を参考にして私なりにかみ砕いた上で、助詞の「ハ」と「ガ」の違い、「ハ」の働き、段落内の要点を示す文を先に置くと読み手に親切であること、本当らしさをもたらす論拠（法則的なものと経験的なもの）について、などを補足した。

この回の最後に、次回（授業の最終回）に、優秀作品のコンテストを開催し、授業に利用した文献リストを配付することを予告した。2010年度の金曜開講科目の場合、補講日などのスケジュールの都合で、第14回と第15回の間が3週間空いた。

第15回

最終回である。前回学生が提出した課題から15作品を選んでA4判2枚（各両面刷り）のプリントをつくった。コンテストのエントリー作品である。600字の文章一編を読む時間と、もう一度読みなおす時間を考えると、15編くらいが適当だろう。良いと思う作品に印をつけていったら30編を超えてしまったので、更に精選するのに苦労した。

百均ショップで金色枠入り賞状用紙6枚入りを購入し、パソコンで印字すると立派な賞状の出来上がり。受賞者の氏名を書き入れるペンを持参して準備完了である。

プリントには以下のような言い訳と指示が書いてある。

2010年度論理的文章作成法課題第5弾コンテスト（551～600字、テーマと文体は自由）

全員分を掲載したいくらい全体にレベルが高かったのですが、わずか15編だけ、独断と偏見と勢いで選んでみました。「自分の方が良かったのに……」と思う人もたくさんいるでしょうが、ごめんなさい。これから新聞などへどんどん投稿してください。

「赤ペンさん」の添削に従った部分や、漢字のミスの訂正など、一部原文のままではないところがあります。個人名がわかる部分は伏せ字にさせていただきました。ジャンルはいろいろ、おおよそ私的な話から公的な話へと並べてみました。

p.1～p.4の15編を読んで、良いと思ったものを2編選び、番号を出席カードに記入してください。票数の上位1名を最優秀賞、次の2名を優秀賞とし、氏名を公表するとともに表彰します。

開票して読み上げるのは教員で、白板に「正」の字を書いていく係は受講生3名に依頼した。良いと思う文章は人さまざまである。全員が見守る中、最優秀賞33票、優秀賞2名22票（同数）が決まった。用意してあった氏名と作品の照合リストで確認し、受賞者の名前を読み上げて教室前方に出てきてもらい、表彰式を行った。次の賞状の文面に句点がなく、段落初めの1マス空けをしていないのは、書式の慣例による。

賞 状

「論理的文章作成法課題第5弾」コンテスト

（最）優秀賞 ○○ ○○ 殿

あなたは2010年度前期科目「論理的文章作成法課題第5弾」コンテストにおいて、受講生全員による審査の結果、優秀な成績を収められました
よってここにその栄誉を称え表彰します

2010年7月30日

論理的文章作成法科目担当教員 三原容子 [印]

論理的文章作成法受講生一同

30冊余りの文献リストには、学生が読めるかどうかを考慮して「おすすめ度」の★印を0個から3個までつけておいた。★★★印で図書館にない本は、早めに購入と配架を依頼しておいた。CiNii（国立情報学研究所サイト）などで見つけた論文は学生向きではないのですべて★0個とした。

以上が2010年度の第1回～第15回の流れである。成績評価について触れておくと、これだけ真面目に真剣に取り組んだのであるから、圧倒的に秀（S）や優（A）が多いのは言うまでもない。

おしまいに

文章を書くというのは精力を要する作業である。読むことの数百倍の時間やエネルギーを要する。しかし（大学生や大学卒の社会人にとっては）誰にとっても書かなければならない時があり、また（名文の域に達するのは無理でも）誰でも練習次第で伝える文章を書けるようになる。多人数クラスという一見不利に見える条件の下で、なるべく楽しく練習するという授業を工夫して実施してみた。文章力アップの度合いの測定は難しいが、学生と教員の双方が充実感と楽しさを味わったことはまちがいない。授業アンケートの結果もたいへん良好であった。

今後は、「バーナム効果」「ニセ科学」といったトピックや、「推論」や「帰納と演繹」を扱うかどうかということが一つの課題である。トピックはリラクセスさせる雑談の一つとして取り上げ、「推論」や「帰納と演繹」は私が十二分に咀嚼できるまで棚上げするという方向で考えている。

私は非常勤講師として教壇に立ってから20数年間になる。数名から数百名規模で様々な科目の授業をしてきた。経験豊富な教員の部類に入るだろう。今年

度の授業を公開することによって批判叱責をいただきながら、どんな分野の出身教員でも担当できるように、まだ経験の浅い教員にも担当できるように、労力を節減してもより効果が上がるように、さらに工夫を重ねていきたいと考えている。

なお、サイト「ようこそ三原研究室@ネットへ」URL：<http://fm.koeki-u.ac.jp/~mihara/>に、作業シートの一部をPDFファイルで置いておくので、参照されたい。

主要参考文献（学生に対して★★、★★★で示した文献のみ、初版発行年月順）

- ◇能戸清司『ワープロ時代の文章作法』有斐閣新書、1987.6
- ◇木下是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫、1994.2
- ◇安斎育郎『科学と非科学の間はざま―超常現象の流行と教育の役割』かもがわ出版、1995.4
- ◇江川純『レポート・小論文の書き方』日本経済新聞社、1998.2
- ◇菊池聡『超常現象をなぜ信じるのか 思い込みを生む「体験」のあやうさ』講談社ブルーバックス、1998.9
- ◇マイクル・シャーマー、岡田靖史訳『なぜ人はニセ科学を信じるのか』早川書房、1999.2
- ◇道田泰司・宮元博章・秋月りす『クリティカル進化論―『OL進化論』で学ぶ思考の技法』北大路書房、1999.3
- ◇安斎育郎『不思議現象の正体を見破る』河出夢新書、2001.5
- ◇小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2002.4
- ◇荻谷剛彦『知的複眼思考法―誰でも持っている創造力のスイッチ』講談社+a文庫、2002.5
- ◇宮内泰介『自分で調べる技術 市民のための調査入門』岩波アクティブ新書、2004.7
- ◇本多勝一『中学生からの作文技術』朝日選書、2004.10
- ◇安斎育郎『だます心だまされる心』岩波新書、2005.6
- ◇赤木かん子『調べ学習の基礎の基礎』ポプラ社、2006.2
- ◇小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2009.1
- ◇阿部紘久『文章力の基本 簡単だけど、だれも教えてくれない77のテクニック』日本実業出版社、2009.8
- ◇後正武『わかる、使える「論理思考」の本』PHP研究所、2010.3
- ◇野内良三『日本語作文術』中公新書、2010.5